

宣 言

阪神・淡路大震災から 20 年を迎えた 2015 年 1 月 24 日、現在 20 代前後の若者と当時 20 代前後だった若者、そして今は 50 代、60 代、70 代になった世代を超えた人たちが、被災地 KOBE に集まった。震災を経験していない高校生や震災を知らない人たちも参加し、東日本大震災での被災者や支援者も駆けつけた。

私たちは阪神・淡路大震災から 20 年の歩みを振り返り、震災と復興過程で得た経験や教訓が、その後の被災地に、あるいは日常の社会に活かされてきたのかを語り合った。

24 日のフォーラムとその取りまとめの討議を含め延べ 8 日間にわたる議論をとおして「次世代に何を、どのように伝えるのかという一方的なアクションではなく、異なる世代がお互いをパートナーとして協働し、未来社会へ^の遺すものをつむぎ出すということではないか」と共有できた。

高校生や大学生らの若い世代からは、「“アホ”になることも大事」「型にはまらないことも大切」「自分ごととして考え、行動する」「(おまかせ主義ではなく)できることは自分たちでやろう」「ありがとう、大好き、ごめんなさいは言えるときに言っておこう」「思いやりを大切に」など実に率直な意見が出された。これらは、双方の世代が出来てこなかったことでもあり、これから生きる世代が大事にしようという思いも込められている。

20 年前の震災直後、私たちは戦後 50 年を振り返り「大量生産・大量消費・大量廃棄」の社会にどっぷり浸かった経済優先の暮らしを見直し、安全・安心な社会をめざそうと誓ったが、いまなお、そうした暮らしから抜け切れていないことも指摘された。

「こうして物質的な豊かさを求めてひたすら走ってきたこれまでの社会から、あらためてあらゆるいのちを大切にし、生きがいを実感できるような社会をどうすれば創れるのかを、身近な暮らしの中から考え、行動しなければならぬのではないか」ということにつながった。これらの議論の最後には「多世代が一つになった」と共感できる瞬間もあった。

議論を通して何度も確認した大事なキーワードには、「いのちを大切に」「自立と支えあい」「違いを認めよう」「見えないものを見よう」「声なき声に耳を傾けよう」「覚悟」などがあつた。「差別をしない」「多様性を大事にしよう」「個を尊重しよう」ということも共通していた。人とつながるうえでの手ごたえを、実感する言葉だ。

忘れてならないのは、災害の度に、助けられたはずのいのちを救えなかったということ。これからは同じ失敗を繰り返してはならないということ。もうこれ以上繰り返してはならない。そのためには、まず襟を正して死者の魂と向き合おう。これから生きる人のことも考えよう。だから、いまを真剣に生きなければならないのだとあらためて痛感した。その際、私たちは「生かされているのだ」という謙虚な気持ちを忘れてはならない。

さて、先達たちは 20 年前「暮らし再建へ『いま』見すえて」を合言葉に、被災からの再建に取り組んできた。被災者支援においては、被災者が主役であること、また被災者一人ひとりに寄り添うこと。決して上から目線で被災者を一括りにしないことを実践知として学んできた。

その問題解決をはかるには、「自分たちでできることはやる、個人でできないことは一緒に、それでもできないことは行政に」という「補完性の原理」が大切であるということではないか。この考え方はそもそも「災害ボランティアの基本的な姿勢」にも通じるだろう。例えば、被災地において被災当事者と支援者、支援者同士の関係についても議論をした。支援に入るボランティアはとまず

れば終わりのない支援の重さに押しつぶされそうになるが、支援にはゴールがない。支援を受ける側（受援）と支援者、支援者同士の関係は固定したものではなく、回りめぐるものではないかという意見も出された。考えてみれば、「災害ボランティアの基本的な姿勢」は平時においても持続可能な減災社会を築くことにもつながる。

ボランティアとは、人として如何に生きるかという姿勢ではないかと言える。人として助け合うという当たり前のことが、ボランティアという言葉があるためにハードルが高いという印象を与えるなら、いっそのこと「ボランティアという言葉にさよならをしよう」という意見まで飛び出した。

他方、ボランティアという言葉も安易にさよならするのではなく、本来の活動に至るプロセス、一種の”修業”として実践を続けることが大切ではないか。いま、私たちはそのプロセスとして 21 年目の一步を踏み出そうとしているのではないだろうか。最初の一步を踏み出すには、あらためて「覚悟」が必要になる。自分と向き合い、生きるためにどうすればいいのかという、「気づき」や「目覚め」でもある。

先人から受け継いできた大切なことは、未来へも継承したい。ネイティブ・アメリカンの人たちは、生きていくうえで大切なことは、「子どもたちの、子どもたちの、子どもたちのために継承していかなければならない」と 12,000 年も前から言い続けてきた。

20 年前に KOBE の被災市民は「市民と NGO の『防災』国際フォーラム」という場をつくり、神戸宣言という貴重なメッセージを遺してくれた。その最後に、復興の道を踏み出すには「被災地の私たちは、自ら「語り出す」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」行動を重ねようと呼びかけた。その後「育む」という言葉も加えられた。

私たちは、未来社会へのメッセージとして、これまで先人が築いてきた「知恵」を生かしながら、次世代の新鮮なアイデアや感性を加え、大切なことを未来社会に伝え続けたい。その時々に必要な新しい社会を創りだすために……。

2015 年 1 月 31 日

阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム実行委員会